

輪島塗コンシェルジュの育成と新工房巡りシステムの構築

輪島塗再生プロジェクト実行委員会

安嶋 是晴

1 はじめに

2015年3月、北陸新幹線が開業し、2015年4月から輪島を舞台にしたNHKの朝の連続ドラマ「まれ」が放映されるなど、輪島では観光による地域振興に強い期待が寄せられた。そうした追い風はあるものの、金沢駅からの二次交通の問題や、地域側の受け入れ態勢など課題も多い。確かに輪島には、輪島朝市、千枚田といった観光資源が豊富にあるが、現在の観光地や景勝地に頼る観光戦略では限界があると思われる。ソフト面では地元の観光ボランティアガイドも存在するが、養成プログラムも確立されておらず、常に人材が不足している状態である。現状では目の肥えた観光客をリピーターとして取り込むのは困難であり、新しい仕組みの構築が求められている。

そこで本事業では、輪島塗の知識習得に特化した人材育成塾を開催し、それらを学んだ人材を「輪島塗コンシェルジュ」として新しい工房巡りの案内人とするシステム構築をめざす。受講対象は漆器業者や観光業者、地域住民とする。実際に輪島には地元産の輪島漆が存在し、輪島塗には地元産木材が一部使用されていること、さらに地元漆掻き職人や目利き材木商人の存在していることは、あまり知られていない。この輪島塗の潜在的な資源はとても興味深いものであり、それらを総合的に学ぶ講座は貴重である。さらに学んだことを効果的に活用する場も必要である。学びを生かす場として新しい工房巡りシステムの構築を

図る。これまでも漆器の製造現場を見て回る工房巡りは存在したが、今回の企画では、漆の植栽現場や漆の精製現場、輪島地の粉の発掘現場など、これまで注目されてこなかったエリアを工房巡りルートとして結び、新しい観光モデルの創出を目指す。

2 事業実施の背景

輪島の観光に関するデータを見てみると、1992年の観光客は230万人であったが、ここ数年は100万人程度まで落ち込んでいる。2015年度は北陸新幹線開業やNHKの朝の連続ドラマ「まれ」の放映効果などで140万人程度と3.4割増加が見込まれている。輪島朝市に「まれ」の撮影セットを常設するなど効果を持続させる取り組みが行われているが、一過性のものとなり忘れ去られてしまう可能性は高い。これまでの観光事業者（旅行業・宿泊業・交通事業者）が主体となって観光地や景勝地に観光客が送り込むハード主体の観光は、観光客の多様なニーズに対応できず、リピーターとなるのは難しい。そこで地域の自然や産業、文化などを観光資源として位置づけ、体験や交流を楽しむニューツーリズムが台頭するなかで、輪島塗の工房巡りに注目をした。

では輪島塗の工房巡りはこれまで行われていなかったのか。決してそんなことはない。表1のとおり輪島では継続的に工房めぐりシステムを構築しようとする動きがあった。

表1 輪島工房めぐりのこれまで

	事業名	実施年	実施主体	事業内容	備考
1	輪島塗工房めぐり	平成15年 (2003)	輪島漆器商工業 協同組合	・リーフレット作成 ・各工房に木製看板を設置 ・看板のある工房が見学可能 ・案内人なし、無料	
2	輪島工房長屋	平成15年 (2003)	株式会社まちづく り輪島	・職人が作業を公開 ・蒔絵・沈金体験が可能 ・輪島工房長屋情報工房のスタッフが 見学できる工房を紹介 ・案内人なし、無料	輪島市からの指定管理 で運営
3	土蔵漆見	平成21年 (2009)	NPO法人輪島土 蔵文化研究会	・アーティストインレジデンスの企画 ・地元食材を使った料理研究会の開催 ・リーフレット作成 ・工房・土蔵の見学受付 ・予約制・有料	文化交流型社会形成に よる被災過疎地再生計 画に基づく官民パートナ ーシップ確立支援事業 (内閣府地域再生事業推 進室)
4	輪島塗塗師屋工 房めぐり	平成23年 (2011)	輪島漆器商工業 協同組合	・リーフレット作成 ・石川県の「ふるさと博」期間中、工房 前にのぼり旗を設置し、のぼりのあ る店が見学可能 ・案内人なし、無料	能登半島地震震災復興 基金 能登ふるさと博関連イ ベントの一つ
5	輪島塗工房めぐり 輪島のれんばなし	平成25年 (2013)	輪島漆器商工業 協同組合 (輪島市が補助)	・工房にのれんを設置 ・リーフレット作成 ・のれんを出している工房がその時 見学可能 ・案内人なし、無料	翌年に外国語版パンフ レット制作 (英、仏、独、中、韓) スマホWEBサイト制作
6	輪島工房めぐり	平成26年(2 014)	株式会社まちづく り輪島(輪島市が 補助)	・リーフレット作成 ・案内人あり(2名雇用) ・旅行社のツアーに対応 ・一部有料	緊急雇用創出事業(起業 型・厚生労働省)

※平成15年(2003)以前も、大手漆器販売業者が店舗内に職人の作業を公開するスペースを設けている場合や、漆器販売業者が木
地や塗りの作業現場を案内することはある。

※以前から輪島市や輪島漆器商工業協同組合、輪島市観光協会が見学可能な工房一覧(連絡先を含む)を作成し公開している

注目すべきは、2003年と2009年である。2003
年は能登空港が開港した年であり、いかに観光客
に新しい観光メニューを提示できるかが課題で
あった。その中で工房めぐりに注目が集まったが、
見学可能な工房に看板を設置(写真)し、実際の
見学は観光客が直接アポイントを取る方法のた
め、ほとんど機能しなかった。2009年には能登
震災が発生し、復興のための予算が多く確保され、
その一貫で工房巡りに再度焦点があたったが、や

はりコーディネータ不在の仕組みは機能しなか
った。

したがって工房見学の企画は継続的に出てく
るものの、仕組みとして構築するには至っていな
い。このメリット・デメリットを整理しておかな
ければ、今後どれだけ工房見学を企画してもうま
くいくことはない。それでは実際のメリット・デ
メリットはどのようなものがあるのか(表2)。
工房見学に関しては多くの人は趣旨に賛同する

が、主体、人、お金、仕組みをどうするかが大きな課題であり、さらに受益と負担の関係が難しい。また現在見学できる工房も偏っているため、新たな見学先（観光資源）の開拓することも課題である。



工房見学が可能な「塗師屋」の看板

表2 工房見学のメリット・デメリット

輪島工房見学のメリット・デメリット	
メリット	デメリット
・観光メニューの増加	・企画コーディネート負担
・輪島塗の理解の深化	・案内（人）の負担大
・輪島塗の販売促進に貢献	・作り手（見学先）の理解不足
・工房めぐりの収益の可能性	・利益分配の困難性

3 実施事業について

このような状況で、新たな工房見学のシステムを構築するために、輪島うるし塾を企画した。この塾はこれまであまり注目されてこなかった漆や木地に焦点をあて、座学で知識を習得するとともに、実際に現場での視察をセットにすることで、人材育成と工房めぐりの新たなルート開拓を同時に図ろうとするものである。そしてその内容は表2の通りである。



講義風景



植栽地 視察風景



ワークショップ風景



下地工房見学



材木商倉庫見学



特別ゼミ 他産地の漆器との比較



特別ゼミ 水野氏講義

表3 事業実施一覧

回	日時	タイトル	講師
第1回	10月10日(土) 13:30~17:00	漆器づくりで使う木の世界(ウルシ編)	小谷 二郎 氏 (石川県農林総合研究センター主任研究員)
第2回	10月24日(土) 13:30~17:00	漆器づくりで使う木の世界(木地編)	小谷 二郎 氏 (石川県農林総合研究センター主任研究員)
第3回	11月15日(日) 13:30~17:00	工芸史から紐解く下地技法と輪島地の粉	山崎 剛 氏 (金沢美術工芸大学教授)
第4回	11月29日(日) 13:30~17:00	「漆」の現在と未来—輪島産漆どうする?	本間 幸夫 氏 (NPO 法人 壺木呂の会 理事長) 神長 正則 氏 (奥久慈漆生産組合 会長) 宮地 順子 氏 (コミュニカ(株) 代表)
特別ゼミ①	12月29日(土) 19:00~21:00	国内漆器産地との比較でわかる輪島塗	山崎 剛 氏 (金沢美術工芸大学教授)
特別ゼミ②	1月23日(土) 19:00~21:00	工房めぐりから考える輪島塗と観光	水野 雅男氏 (法政大学現代福祉学部教授)

また4回の講義、2回のゼミナール実施後、具体的に新しい工房見学の可能性を図るため、2回の実験事業を行った。ただしこれらは輪島漆再生プロジェクトの主催ではなく、協力という形で開催している。

工房めぐり実験1（輪島市教育委員会主催）

日時：1月23日（土）13:00～15:00

テーマ：中島屋大切籠 修理見学会

内容：1853年製造のキリコ（祭りで使用する奉灯）の修復現場を見学



修復風景



修復風景

工房めぐり実験2（輪島 KABULET）

日時：2月23日（土）10:00～16:00

テーマ：移住者向け工房めぐり

案内人：佐々木栞氏（輪島漆芸研修所卒業生・沈金師）

内容：輪島漆芸美術館、輪島漆芸研修所、田崎蒔絵工房、沈金体験、蒔絵体験



沈金体験



蒔絵工房見学

4 実施事業の成果

今回輪島うるし塾を実施し明らかになったことは大きく2つある。一つは工房見学に木や漆、修理現場などの潜在的な資源を活用することは有効であるということだ。多くの参加者が高い関心を持ち、取り組みを評価する声が聞かれた。もう一つは塾の開催による啓発機能である。これを機会にウルシの森づくりに取り組もうという動きや工房めぐりをシステム化したいという人材、できる範囲でウルシの木を植栽していこうという人材が台頭したことである。輪島漆再生プロジェクト実行委員会として、塾の継続実施をはかるとともに、既存の工房見学先をリスト化し、信頼関係を構築しながら、より質の高い見学先へと昇華させていく。そして既存の工房のみならず、今回の事業で実施した木地やウルシの植栽現場、輪島地の粉などの精製現場など、新たな見学先の開拓を図るとともに、採算のとれる工房巡りシステムを構築することが求められる。

5 今後の展開と課題

さてまとめに入る。実際にこれまでの工房見学を考察すると多くの課題があり、工房見学がシステム化されないことが明らかになった。

特に案内人（コーディネータ）の重要性が挙げられる。連絡先を記載したマップの作成だけでは、自分からアポイントを取って見学している人は限られている。見たい人だけ見ればよいという高飛車な態度ではなく、進んで工房を開放する姿勢が必要であろう。また公開するのであれば、無愛想に作業を見せるのではなく、見学者を感心させるような話も織り交ぜるべきである。その関係は見る人、見せる人ではなく、作り手と使い手の相互尊重の場であり、仲介者の力量が重要なポイントとなる。

そしてリピーターを獲得するためには、見学先のバリエーションをそろえ、特に定期的な工房見学（入門編）と、より高次の使い手のためにオーダーメイド型の工房見学まで取り揃えておくことが今後必要になるのではないか。つまりシステムとして機能させるためには、を常に意識すべきである。

目の肥えた観光客が増加する中で、輪島漆器の

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 何を観光資源とするのか2. どのように工房見学を運営するのか<ol style="list-style-type: none">(1) 主体(2) 人(3) お金(4) 受入体制3. 誰をターゲットにするのか |
|--|

細部がわかる工房見学は最高の観光資源となりうる。その工房見学を機能する仕組みにするには、産官学民が連携して責任が持てる組織をつくり、信頼される案内人（コーディネータ）が配置され、持続的な運営を実現する収益をあげながら、適正に分配する仕組みが必要な要件となる。そしてその対象は観光客だけでなく、地域住民も巻き込みながら資源の発見、活用を繰り返していくことで良い循環となると考えられる。

いずれにしても観光振興は、地域住民、地域産業などが様々な形で関連しながら協働し、地域の未来を構想していくものである。まだ輪島の取り組みは端緒がついたばかりであるが、観光地かつ伝統産地としてのアドバンテージを活かしつつ、地域再生のモデルとなるような取り組みに育て上げていく。